

私の中のアフガニスタン

Chris Steele-Perkins



クリス・スティール＝パーキンス / Chris Steele-Perkins

1947年、ビルマに生まれ、49年イギリスに移住。2つの大学で化学と心理学を学ぶ。在学中から学生新聞の写真家兼ビクチャーエディターとして働き、71年ロンドンに移りフリーランスとして活動を開始する。バングラデッシュを長期取材したのち、大学で写真を教える。77年イギリス美術協会の写真委員に就任。79年よりマグナムに参加、82年に正会員となる。社会問題を映像によって訴えることを活動の主体にしており、オスカー・バーナック賞や英国で最も優秀なフォトジャーナリストにおくられるトム・ホプキンソン賞を受賞している。89年、ロバート・キャバ賞受賞。近年は、小型ビデオカメラを駆使して、ドキュメンタリーの分野に進出している。95年より98年まで、マグナムの会長を務めた。現在、マグナム東京担当副会長。2000年5月に写真集『アフガニスタン』（仏語版）を出版。在ロンドン。

1994年、「国境なき医師団」と共に初めてアフガニスタンを訪れてから、私はどうしてもなくこの国に惹きつけられてしまった。それほど印象を残さない土地もあるのに、こんなにもその魅力が身体の中にしっかりと染みこんでしまう土地があるのはなぜだろう。とにかく、アフガニスタンとその土地に住む人々はウィルスのように私の血の中に潜り込んでしまった。そして私はその後、3回もこの地を訪れることになった。

私がいつも目を奪われるのは、<中流階級・英国人・男>である自分にとって馴染みの生活やスタイルとはかけ離れたものだ。そして私は写真という道具を持って、こういう「アナザーワールド」を探検する。そしてアフガニスタンはまさに「アナザーワールド」だった。ワイルドで、中世的で、残酷な国。巧智にたけ、美しく、優雅で、寛大で風変わりな人々。写真集『アフガニスタン』の中で私はこう書いた「アフガニスタンに無関心でいるなんて無理だ」。この国の魔法、この土地の狂気も、どんなクールな態度も突き破ってしまう。この土地に足を踏み入れたことがあって、その出会いに心をゆすぶられなかった人は私の周りにはいない。

最近のアフガニスタンの情勢は、私の作品に新しい今日性を与えた。私のこの国に対する興味や関心が、今や全世界の人々と共通するものになったからだ。以前はアフガニスタンという国の存在を知らなかった人も、今は知っている。アフガニスタンがあることは知っていたけれど、どこにあったか知らなかった人も、今は知っている。けれども、この土地についてきちんとした知識を持っている人はほとんどいない。

人々がアフガニスタンと聞くと、問題の多い地域だという。そう、確かにアフガニスタンは長い間問題を抱えてきて、今はもっとひどい問題を抱えている。当然、マスコミの報道はこの「問題」に焦点を当てている。それがジャーナリズムの本質なのだ。そもそも私がアフガニスタンに初めて行ったのもこのためだった。でも、私はそういったトータル、戦争、破壊...そういったものを越えたその先を見たい。もっと広く彼らの文化を写真に捉えたいと思った。人々が働き、生活を営む様子、一年が過ぎていくリズム、彼らの喜び、彼らの悲しみ。単に戦争報道のステレオタイプを繰り返すのではなく、この国の人々

の全体像を描き出したいと思った。

もちろん、戦争とその直接の結果である破壊、悲嘆、苦痛を無視することはできないし、無視することはしなかった。でも、私は平和な地域も旅してみたかったのだ。この国には平和な土地だってたくさんある。そしてそういう土地の写真を撮った。

今、アメリカと西側諸国はアフガニスタンに介入し、そこに住む人々はさらに辛酸を味わっている。すでに廃墟だった町は叩き潰され、人々は荒れ果てた家を捨てて逃げ出さなければならない。アメリカは1979年にも、ソ連のアフガニスタン侵攻に対抗するためこの国に介入した。そして、アフガン人たちがソ連に反対するイスラム勢力に武器を与え、訓練を施した。この中にはかつての盟友、オサマ・ビン・ラディンもいた。ところが、目的が達成され、1989年にソ連が屈辱の中撤退すると、アメリカは共に戦ったアフガン人とイスラムの戦士たちに背を向けてしまった。ムジャヒディンこそが、何十万ものアフガン人の命を犠牲にしながらも、最新兵器を備えたソ連軍を打ち破ったというのに。アメリカ人は、もはや用済みとなった友には冷たかった。これでは憎まれても不思議ではない。アメリカ人が彼らに残したのは権力の空白だった。ソグイェトと戦うために団結したムジャヒディンは今や互いに権力を巡って争い、混乱状態に陥ってしまった。

この時代の混沌とした状況が、今アメリカが戦っている敵である原理主義集団タリバンを招く土壌となった。タリバンは平和に飢えていた民衆に平和をもたらすことを約束した。タリバンの「神の戦士たち」を歓迎した人は多かった。タリバンは初めてのうちはある程度の平和と安定を実現したからだ。隣国パキスタンは彼らを支持し、しかもアメリカも同じ態度をとっていた時期があった。しかし、タリバンの極端な政策は、彼らが政権をとる前の混乱状態と同じく耐え難いものとなっていった。結局、宗教的原理主義に基づく暴政が混乱と無秩序にとって代わっただけだったのだ。タリバンは西側諸国と断絶し、西側諸国もタリバンとの交渉を絶った。そしてアフガニスタンはテロリストの温床となった。アメリカがソ連と戦うために訓練し、そして「自由の戦士」と呼んだ同じ人々が、アメ

リカをソ連とはまた別の帝国主義者と呼び、反旗を翻した。帝国主義者・アメリカはサウジアラビアの聖地を武器で汚し、イスラエルを支持しパレスチナ人を虐げ、パレスチナの聖地をも汚した。自由の戦士たちの中にはこのように考える者も少なくない。

アフガニスタンが安定した、そこそこ豊かな国として立ち行くように手を貸す努力を、西側諸国が真剣に行っていたらどうなっていたか。私たちは想像するほかにない。うまくいったかもしれない。アフガニスタンは、かつて学問と芸術が栄え偉大な伝統を持つ素晴らしい国だった。その姿を何らかの形で回復することができたかもしれない。もしアメリカがアフガンの友に背を向けなければ、タリバンが権力を掌握したのだろうか？ビン・ラディンの安全な隠れ場所になったのだろうか？9月11日の悲劇は起こったのだろうか？

過去を変えることはできない。私たちにあるのは現在と未来を夢見ることだけだ。アフガニスタンの未来とは何だろうか？アメリカは北部同盟が権力を回復するシナリオを考えているらしい。しかし、北部同盟といったら腐敗と内部紛争で結果的にタリバンの台頭を許した張本ではないか？北部同盟にできることはタリバンと同じだ。西側諸国はアフガン人たちに惜しみない援助や様々な支援を申し出ている。しかし、ビン・ラディンに破ったその後には果たして約束は守られるだろうか？アフガンの人々はこのように約束をそのまま素直に受け入れるだろうか？力の政治に翻弄されてきた人々が、慈悲深い神の清らかな手を求めるのは当然ではないだろうか？

初めてアフガニスタンを訪れたとき、片足自転車レースを観に行った。私の目にもそれは異様に映った。でも、私はすぐに理解した。地雷

マグナム・フォート
1947年、ロバート・キャバの発案で、アンリ・カルティエ＝ブ
レソン、ジョージ・ロジャー、デビッド・シーモアらが設立
した、会員が出資して運営する写真家の組織。当時は、雑
誌『ライフ』に代表されるグラフィジャーナリズムの最盛期で
あったが、作品が雑誌に掲載される際、編集者によりトリ
ミング、不正確なキャプションをつけられることが当たり
前のように行われていた。マグナムは、このような事態を
防ぎ、写真家の権利と自由を守るために創設された。なによ
りも、写真家自らが自分のネガを管理し、著作権を保持す
るということ、そしてそれを世の中に認めさせたというこ
とは、写真の歴史上において非常に画期的なことであった。
1997年に創立50周年を迎え、創立当初の精神は今なお健
在である。

写真集『アフガニスタン』
日本語版が、晶文社より2001年12月上旬に刊行予定。
お問い合わせ：フォト・ギャラリー・インターナショナル
〒108-0023 東京都港区芝浦4-12-32
TEL：03-3455-7827 FAX：03-3455-8143
E-mail：info@pgi.ac

参考書籍『アフガニスタンの風』
ドリス・レッシング著／加地永都子訳
晶文社より刊行（一般書店扱い）
長年アフガニスタンの救援運動に関わってきた現代イギリスを
代表する女性作家による、アフガニスタンの戦争を内側からつ
づったレポート。

の爆発で片足を失った人の数がそれほどまでに
多かったのだ。レースは生き生きとした楽しい
ものだった。人々は自分を哀れむことなく、「生」
を謳歌していた。だれが優勝したかは分からない。
勝ち負けを気にする人はいなかったと思う。レ
ース後、人々は近くのモスクに集まった。そこで
祈り、詩を朗読した。アフガン人は花を愛する
ように詩を愛する。私は後でテレビの短編ドキュ
メンタリーを制作するため、何篇かを録音した。
20歳くらいの若い男がマイクにいざりよった。

戦争は私から両足を奪った
今私に残されているのはこの両手
私一人だけではない
足を失った人 手を失った人
昼も夜も私は嘆き続ける
平和は再び訪れるのか
この国が灰の中から立ち上がるのを見たい
もう墓を掘るのはいやだ
でも私たちにできることは何もない
神よ これ以上の破壊から私たちをお救い下さい
神の御名において 神の御名において 神の御
名において
もう戦いにはつかれた
戦争のことは忘れて 平和について語り合おう
今一度 幸せをとりもどそう

I was drawn to Afghanistan after having visited it for the
first time on assignment for Medecins Sans
Frontieres(MSF) in 1994. Who knows why exactly one
place fascinates and absorbs you and another leaves you
relatively indifferent? All I know was that Afghanistan and
its people got into my blood stream like a virus and drew
me back there again three more times.

I have always been fascinated by that which is different,
far removed from the life and ways I know as a middle-
class Englishman. Photography is my tool for exploring
these different worlds, and Afghanistan was a very
different world: wild, medieval, cruel, clever, beautiful,
gracious, generous and extraordinary.
In my book, Afghanistan, I wrote - it is impossible to be
indifferent to Afghanistan. Its magic and madness rip
through any posture of detachment. I know of nobody
who has been there who does not have strong feelings
generated by the encounter.

Recent events in Afghanistan have given my work there a
new relevance, as my interest and concern with that

country has become shared by the whole world. People
who never knew Afghanistan existed certainly do now.
People who knew it existed, but never knew where it
was, do now. Yet people still know so little.
What people do know about Afghanistan is that it is a
troubled place, and indeed it has been for a long time, and
is further troubled now. Inevitably the trouble was the
focus of most reporting: that is the nature of journalism. It
is what first brought me there too. But I wanted to look
beyond the troubles, the war, the destruction, and
photograph the wider culture: to look at the way people
worked and lived their lives and the rhythms of the year.
To look at their joys as well as their sorrows. To try to
build a picture of a whole peoples, not simply to reinforce
the stereotype of war.

I could not ignore the war and its immediate
consequences of displacement, sorrow and pain, and did
not do so, but I also wanted to travel in the peaceful areas
- for there were many peaceful areas - and photograph
there too.

Now America and the West have intervened in
Afghanistan and brought more suffering on the people
there: more destruction on the existing destruction; driven
more people from their deserted homes. America
intervened before in 1979 to counter the invasion of the
Soviet Union. Then they had armed and trained the
Afghans and other Islamic opponents of the Soviets -
including their old friend and ally, Osama Bin Laden.
Then, once their purpose was over, and the Soviets
withdrew in humiliation in 1989, the Americans walked
away from their friends and heroes, the Mujahadeen, who
had defeated the Soviet war machine at the cost of
hundreds of thousand of Afghan lives. The American
walked away from their friends for they were no longer
useful to them. Do we wonder that some people do not
like them? They left a power vacuum in which the
Mujahadeen, who had been united in fighting the Soviets,
now fought amongst each other for power, creating chaos.

The chaos of those times laid the groundwork for the rise
of the Taliban, the fundamentalist movement that America
is now fighting, for the Taliban offered the precious
promise of peace to people who desperately wanted it.
Many welcomed these religious warriors, for indeed they
did, initially, bring some peace and stability. Neighboring
Pakistan welcomed them and supported them and so, in
the beginning, did America. The Taliban's extremist ways
were to become as unpalatable as the chaos that they
claimed to replace. The tyranny of religious
fundamentalism replaced the tyranny of anarchy. They
isolated themselves from, and were isolated by, the West.
They became a haven for terrorists. The people that
America had trained to fight the Soviets and called
Freedom Fighter, now turned on the Americans as
imperialists of a different kind from the Soviets.
Imperialists who desecrated their holy islands in Saudi

Arabia with their weapons, who desecrated the holy lands
of Palestine with their support of the Israelis in crushing
the Palestinians. That is how some of the Freedom
Fighters, came to see it.

We can only speculate as to what would have happened if
the West had made serious efforts to aid and rebuild
Afghanistan as a stable and reasonably prosperous country.
It could have been done. Afghanistan had a great tradition
for learning and arts, a great culture, which could have
been rebuilt in some form. If America had not walked
away from its friends would the Taliban have come to
power? Would Bin Ladin have found safe haven there?
Would Sept 11th have happened?

We cannot change the past, we only have the present and
the dream of the future. What is the future for Afghanistan?
The American seem to see it in terms of returning the
Northern Alliance to power. But the Northern Alliance are
the very people whose corruption and infighting brought the
Taliban power. They have nothing to offer but more of the
same. Will the West give all the promised aid and
assistance it now offers to lavish on Afghanistan once its
purpose of destroying Bin Ladin is over? Will it really keep
its promises? Can the Afghan people be anything but
cynical over these promises? Can it be any wonder that
people so damaged by the politics of power look inward to
seek the pure hand of a merciful god?

On my first visit to Afghanistan I went to a one legged
bicycle race. It seemed a strange event to me, but then I
realised how many people are one legged due mainly to
land mine explosions. It was a joyful occasion, a rejection
of self-pity for an affirmation of life. I don't know who
won, and I don't think any one cared. Afterwards people
moved to a nearby mosque. They prayed, they read
poems. Afghans love poetry, as they love flowers. I
recorded some as I was filming for a short documentary I
was making for television. A young man, maybe 20 years
old, limped up to the microphone,

This war has taken my legs
Only my hands remain to me.
Like me there are many others:
Some without legs, some without hands,
Day and night I cry for what has happened.
I ask if peace will ever come again?
I want this country to rise from its ashes.
We do not want to dig more graves
But we are powerless.
God save us from further destruction.
In God's name, In God's name, In God's name,
We are tired of this war.
Let us forget war and speak of peace.
Let us be happy again.

Chris Steele-Perkins 23. 10. 2001